

伊予市

じんけん教育

2013
No.

16

一人ひとりの人権が尊重される、明るい伊予市をめざして

編集・発行／伊予市教育委員会（〒799-3113伊予市米湊768番地2 ☎ 089-982-5155）愛媛県人権教育協議会伊予市支部

いろいろな人とかかわりの中で育つ子どもたち

の
所
え
育
う
保

うえの保育所は、市中心部から北東に

位置し、静かで緑豊かな田園に囲まれた
保育所です。そのような環境の中、「明る
く元気な子」「思いやりの心をもった子」
「友だちと仲良く遊ぶ子」「表現豊かな子」
を保育目標に取り組んでいます。隣接している「デイサービスセンタ
ー」ものさと「のみなさんには毎月の誕生
会やお祝いものごっこなどに来ていただ
き、ふれあいの機会をもっています。参
加してくださる高齢者の方たち子ども
たちに向けられる声や表情は穏やかでと
ても温かです。敬老週間には数回子ども
たちが同い、歌や踊りを披露したりふれ
あい遊びを一緒にさせてもらったりしま
した。「お肩をたたきましよう」と、肩
たたきでは笑顔と共に「気持ちええなあ」
「ありがと
う」と言っ
てもらい、
子どもたち
は自分たち
の気持ちを
受け入れて
もらった心
地よさや、
人の役に立
つ喜びを実

感することができました。

毎年、地域の方がさつま芋を育ててく
ださり、伺うと、「楽しみにしとったよ」
と子どもたちを迎えてくださる芋掘り。
「なかなか出てこんのよ」と悪戦苦闘し
ていると、「一緒にしようか」と手伝って
くださいます。「やったね、よう掘れたね」
と声をかけて
もらい満面の
笑み。温かな
眼差しの中、
のびのびと楽
しむことがで
きました。「み
んなにもあげ
ようや」と、
保育所で待つ
小さい組の子
どもたちを気にかける言葉も聞かれまし
た。優しくされると自分も同じように人
にもしてあげたいという気持ちが子ども
たちの中に生まれてくることをとてもう
れしく思います。また、いただいたお芋
を使って年長児ぶりん組の子どもたちが
さつま芋入りカレーをつくりました。「あ
まくておいしいね」「三回もおかわりした
よ」「ぶりんさんありがとう」「みんなから
出てくる声に嬉しそうな顔、満足そうな顔。さらに小さい子どもたちへのいたわ
りや思いやりの気持ちが育つことを期待
しています。伊予中学校からは多くの生徒たちに授
業の一環として来所してもらい、生徒た
ちが考えた遊びを一緒に楽しんでいます。
全力で遊んでくれる生徒たちに、はじめ
は少し恥ずかしそうだった子どもたちも
時間が経つにつれ「お姉ちゃん、あれ一緒
にしよう」「抱っこしてもらった」と伝え
るようになり一緒に遊べる嬉しさを満喫
していました。学校に帰る時には、名残惜
しそつに「また来てね」と見送りました。
伊予小学校「放課後子ども教室」の児
童たちとのふれあいも、子どもたちにと
って楽しみとなっています。紙芝居や絵
本の読み聞かせでは、真剣に見入ってい
ます。知っているお兄ちゃんやお姉ちゃ
んがいることも嬉しいようです。子どもたちが、いろいろな人とかか
わりを通して様々な経験をすることで、
人と共に生き
ることの喜び
や人とつなが
ることの喜び
を実感し、人
とかかわる力
や優しさ、思
いやりが一人
ひとりの中に
育っていくこ
とを願ってい
ます。

人権・同和教育への取組

差別に気付き、差別を許さない児童の育成

伊予市立由並小学校

由並小学校では、「よく学び、最後までがんばる
由並つ子の育成」を目標に、豊かな人間性を育むた
めの教育実践を行っています。人権・同和教育では、
「差別に気付き、差別を許さない児童の育成」を目
標に、全ての教育活動を通じて「差別に負けないた
くましい子」「差別を許さない考える子」「差別をしな
いやさしい子」の育成に努めています。

人権劇を通して学ぶこと

本校では、毎年十月に人権集会を開催しています。
集会のメインは、二十年以上続いている人権劇の上
演です。四年生児童が、脚本をはじめ、舞台装置・
衣装も自分たちで作
る、オリジナルのも
のです。

今年度は、「おくび
ょうなライオン」と
いう題のオペレッタ
劇を四年生児童二十
三人が演じました。
八匹のきょうだいラ
イオンのうち、足が
不自由なためうまく



人権劇「おくびょうなライオン」



未来に向けて歩き出そう!

ている児童や保護者は、登場人物の気持ちの変容と、
四年生児童の迫真の演技に、強く心を動かされてい
ました。ある保護者の感想です。

「やさしいことや苦手なことはだれにでもあるけれ
ど、その反対に得意なこともあります。ジルが自分
のよさをよく知っていて、そのよさを生かして、そ
して何より勇気を出して兄弟たちを助けたことが、
立派だと感じました。また、はじめは誤った考えを
もっていたライオンたちが、自分たちで過ちに気付
けたこともすばしかったです。世の中には、いろ
いろな人がいるけれど、弱いところを補い合って支
え合って生きていくことの大切さを子どもたちは感
じたのではないのでしょうか。ありがとうございました。」

走ったり獲物をと
ったりできない主
人公のジルと、ジ
ルに寄り添う仲間
たちの話です。

演じる子どもた
ちは、登場人物の
性格や思考をよく
とらえて、せりふ
や動きを工夫して
いきます。観劇し

毎年、四年生による人権劇を通して、児童・保護
者・教職員が、自らの生活を振り返り、由並小のみ
んなが人権感覚を磨いています。

同和問題学習を見つめ直す

伊予市では、小学校六年の同和問題学習を人権・
同和教育の「核」として、同和問題について正しく
理解するために、それまでに何を学ばなければなら
ないのか、また、差別をなくすための知識と実践力
を培うために、どのような学習を展開していかなけ
ればならないのかを考え、実践を積み重ねています。

今年度、由並小学校では、人権・同和教育の年間
計画を見直し、仲間意識を育てる集団づくりや基礎
学力の定着に努めています。そして、六年生の社会
科では、伊予市の人権・同和教育主任会で作成した
授業用資料を活用しながら、伊予市で起こった米騒
動や全国水平社の創立、その一年後に起こった伊予
市の水平社支部設立などの人権獲得の歴史を学んで
います。水平社運動という誇りある運動が、自分た
ちのふるさとでも展開されていたことや同和問題の



6年生社会科の同和問題学習

解決のために、社会の
一員としてどう生きて
いくかなど、科学的な
認識と差別を見抜く力、
差別を許さない心情を
育てています。

今後、授業実践を
重ね、全教育活動を通
して豊かな心を育てら
れるように努めていき
たいと思います。

伊予市立 中山中学校

自分や友達のよさに気づき、
思いを伝え合い認め合い、
進んで行動する生徒を育てるために

人権・同和教育 への取組

中山中学校は、校区に二つの小学校（佐礼谷小・中山小）をもつ小規模校です。生徒は純真かつ素朴であいさつもよくでき、学習態度もまじめです。人の気持ちを考えて行動できる生徒が多く、互いが支え合う雰囲気の中で和やかに生活しています。しかし、小規模集団であるがゆえに、幼い頃から人々との心のぶつかりあいを経験することが少なく、他者とのコミュニケーション能力が十分に育っていない場面も見られます。そこで、知識として人権を学ばせるだけでなく、すべての教育活動を通して、自分の考えや思いを表現させたり、様々な体験活動から望ましい人間関係の在り方を学ばせたり、自尊感情を高める教育環境づくりを進めたりすることによって、自他を尊重し、人権問題解決のために自ら行動できる生徒の育成に取り組んでいます。

総合的な学習の時間(NET)での取組

本校では、前期の総合的な学習の時間を、全校生徒を縦割りにし、「人権劇」「交流」「環境」の三つのコースに分け、「人権」をテーマに取り組んでいます。

人権劇コースは、自分たちでシナリオや道員、小道具などを作り、学習発表会で劇を発表することを通して、人権の大切さを訴えていくコースです。

(3) どのような内容にするか話し合ったり、台本を何度も見直したりするなど、劇づくりの過程を経て、人権劇を通して伝えたいことを全員で確認し、深めて

いきます。学習発表会の発表においても、伝えるべきテーマや登場人物の心情を一人ひとりが十分に理解して演じることができ、見ていた生徒や保護者からも「いい劇だった」という感想を多くいただきました。人権劇を通して演じる側も見る側も「思いを伝えることの大切さ」など、多くのことを学ぶことができたようです。

交流コースは昨年度まで、子どもと高齢者と交流していましたが、今年度から障害のある方との交流も始めました。車椅子バスケットボールをされている方々に専用の車椅子を準備して来ていただき、車椅子での移動、ツインバスケットボールの体験などを行いました。思い通りに動かせない車椅子に悪戦苦闘しながら、車椅子で生活をされている人の苦勞や、自分が近くにいたときにどのようなことができるかを考えるよい機会になったようでした。また、今年度はさらに地域を知り、ふるさとをかげがえない大切なものにしていくため、地域の観光ボランティアの方々と史跡巡りをしたり、話を聞いたり交流を深める中で、地域を誇りに思う生徒の育成にも努めています。

環境問題は人間の生活、生存に直接関わる問題で、人権の基盤につながっているという考えから、環境コースを新設しました。安心して生きる権利を守るための活動の一つとして水質調査などを行っています。その中で、中山川の水質に問題はないが、ごみが多いという問題点に気付いた生徒たちは、川の美

化を訴えるポスターを作成し、町内各所に掲示することにより環境に対する自分たちの思いを発信しました。

生徒の自尊感情を高める

学級活動での「いいところ探し」や、各行事のリーダーとなった生徒を全校生徒の前で賞賛したり、各学級や学校の代表生徒の作文の発表を全校生徒の前で行い、その発表を賞賛したりする活動を通して、自尊感情を高めるようにしています。

生徒会活動

本校では、世界人権宣言が採決された十二月十日に合わせ、二年前、生徒会主催の人権集会において「中山中学校人権宣言」を採択しました。先輩たちの思いを受け継ぎ、いじめなどのないよりよい中山中学校にしていくため、宣言文を教室前面に掲示するとともに、集会時には生徒会長に続いて全校生徒で唱和するようにしています。

このような活動を通して、生徒は少しずつ自分の思いを伝えられるようになっていきます。自分の思いや意見を言い合える環境は、様々な人権課題に取り組んでいく上でのスタートラインであると考えます。本校の生徒全員が、人権問題解決のために自ら進んで行動できるよう、これからすべての教育活動の中で取り組んでいきたいと思えます。



人権劇の一場面

全体会の様子



第六十四回全国人権・同和教育研究大会が岡山県倉敷市を主会場に開催されました。ハナミズキの赤い実が印象的なマスカットスタジアムでの全体会。順調なスタートでしたが、基調提案のとき予期せぬ雨が降り始めました。気温が下がり風も出てきて寒さが増して

第64回 全国人権・ 同和教育研究大会

きました。しかし、参加者は屋根のある二階席に移動しただけで、特別報告に熱心に耳を傾けていました。参加者の熱意を感じた開会式でした。

大会テーマ「差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう」のもと、地元大会テーマ「熱と光を求めて人権の学びをすべての人に」と合わせて、二日間熱心に研究討議がなされました。

全体会の後、各分科会に分かれて同和教育をはじめさまざまな人権問題の解決と人権文化構築に向けた実践とその研究成果の報告及び質疑と討議がありました。

感想文紹介

「正しく知り、正しく行動する」二日間の研修で、私の心に深く刻まれた言葉です。

私の両親は、大変厳しい人でした。友達と仲よくすることや社会のきまり、

ルールを守ることなど、人として生きていくための大切なことをしっかりと教えられました。尊敬できる両親です。しかし、子どもの頃の思い出の中で、一つだけ母の言動に「なぜ」と、思ったことがあります。それは、ある友達の家遊びに行くことを伝えたとき、あまりいい顔をしなかったことです。友達のことを大切にしないと教えてくれた母の姿とは思えませんでした。この時の「なぜ」という思いは、成人になるまで忘れられていました。

学生時代に同和教育を学習していない世代の私は、教職に就いて、同和教育を知りました。それでも、小学生の頃、違和感を感じていたことが、同和教育と関係しているとは、考えられませんでした。しかし、気が付く出来事がありました。それは、伊予市が現在も継続している地区別懇談会の学習会に参加して帰宅した母の一言でした。

母は、当時の同和教育推進主任の先生の講話を聞き、自分が小さい頃から知らされていたことが、間違いであることを初めて知ったのです。「正しく知り、正しく行動する」ことができなかった母のような人は、たくさんいるのではないのでしょうか。その人達は、正しいことを知る必要があったはずなんです。

今、教育者の一人として、学校教育においてできることは、これから出会う様々な出来事の中に潜む差別や偏見、不合理に気付くことができる子どもを

育てることです。そして、正しく判断し、正しく行動できる子どもを一人でも多く育てることです。そのためには、自分自身の本気の取組が必要です。

今年、地区別懇談会に参加しましたが、参加人数が少なく残念に思いました。それでも、参加してくださっている人がいることに感謝し、学習会を継続させるこそが、大切なのだと感じています。私の母のように、正しいことを知って、自分が間違っていたことに気付く人が、一人でも増えることを願います。数年ぶりに伊予市に帰って来て、伊予市の人権・同和教育に対する取組が熱いことを感じています。本大会で熱と光を感じ、改めて自分の生き方を見つめるよい機会となりました。未来に生きる子ども達に正しいバトンが渡せるよう、人権の学びをすべての人が行うべきです。



分科会の様子

地区別人権・同和教育懇談会

中山地区公民館

中山地区地区別人権・同和教育懇談会の開催にあたり、中山地区内の小中学校の人權・同和教育主任の先生と公民館職員との準備会を二回もち、各会場とも統一した内容にしました。会場は旧校区ごとに四会場で行われました。



小・中学校の取組発表

(5) まず、各小中学校の人權・同和教育の取組を発表していただき、続いてビデオ「くらしの中の人権問題（家庭編）」を視聴。



ビデオ視聴

その後、ビデオの内容を中心に、各学校の人權・同和教育主任の先生方に講話をしていただきました。そして、質疑応答の場をもちました。

嫉と虐待、夫婦間のドメスティックバイオレンス、高齢者に対する人權問題など、家庭におけるさまざまな事柄がとりあげ

られており、改めて人權に対して考えさせられました。

ビデオ以外にもグリム童話「木の皿」の話もしていただきました。やがてはだれでも老いる私達について考えさせられました。

「身元調査おことわり運動」推進の文章とステッカーを配布するとともに二十五年年度用的人權啓発標語の応募依頼をしました。僅少ではありますが、参加者から標語の提出をしていただきました。



懇談会の様子

閉会時、参加者に記入していただいたアンケートには、「良か

った」年に一度はこういう機会をもっとほしい」「ビデオをみて家庭での人權問題に気づきがあった」「我が身をふり振り返り反省する」「学校での人權・同和教育の指導がよくわかった」等々の意見があり、各学校の教職員の方々のおかげで好評であったと思います。

また、反省として人口の多い地区ほど参加者が少なく、参加者は地区の役員さんがほとんどで、今まで参加していない人を巻き込んで輪を広げなければならぬと思いました。

人權・同和教育は非常に大切であり、今後も、継続して啓発活動をねばり強くおこなわなければならないと痛感しました。



人権作文

平成二十四年度もたくさんの人権啓発作品の応募をいただきました。ご協力ありがとうございました。応募数は七百八十四点です。入選作品の中から人権作文を一つ紹介します。

「かけがえのない命」

伊予小学校 五年 中川 翔稀

ぼくの弟は、重い病気にかかり、幼いころから入退院をくり返していました。調子のいい日は、何日か家に帰ってくることもあり、そんなときは家族みんなでゲームやトランプなどをしたり、いっしょにねたりしてふれあいを深めていました。

毎日の病院生活の中で、弟はいつも笑顔がたえませんでした。けれど、弟が病院でどれだけつらい思いをしているのか、ぼくは分かっています。弟は小さい体で、痛い注射にもたえていました。外で友達と遊ぶこともできませんでした。また、食べる物もかぎられていて、好き

な物をおなかいっぱい食べることもできませんでした。それでも涙を見せずに、ぼくらの前では、いつもにこにここと笑っていました。ぼくは、幼いのに弟は何て心が強いんだろうと思いました。

約一年間の入院の後、弟は五歳でなくなりしました。家族みんなは、とても深い悲しみの中にいました。たった五年間しか生きられなかった弟がかわいそうでもありませんでした。生きていたら、もっともっと楽しいことがたくさんあったのに。けれどぼくは、入院中の弟の笑顔を思い出しました。つらい注射や食事など、毎日とても苦しい思いをしていたのに、涙を見せずにけんめいにたえていました。病気に打ち勝とうと一生けんめい生きていました。弟が生きた五年間は、健康な人の五年間よりもずっと中身がつまっているように思いました。五年という短い時間ではありましたが、弟はだれよりも命をかがやかせて生きたと思います。

ぼくは、弟がなくなつたことで、命ってなんだろうと強く考えるようになりました。最近いじめやぎゃくたいなどで、子どもたちの命がよくうばわれています。そんなニュースを見るたびに、ぼくは心

がとてもいたみます。病気や事故などで、生きたくても生きられない命があるのに、なぜ簡単に命がうばわれるようなことが起こるのだろう。かけがえのないたった一つの命がなぜ大切にされないのだろう。この世に、いらない命なんて一つもありません。命の尊さをもっと理解してほしいと強く思いました。

最近ぼくの家には赤ちゃんが誕生しました。家族みんなの願いがこめられた待ちに待った赤ちゃんでした。がんばって生まれてきてくれて、本当にありがとうと心から赤ちゃんに言ってあげました。

ぼくは、弟の死や赤ちゃんの誕生を経験して、命は一人だけのものではないということ強く感じました。一人の命は、ご先祖からの命のつながりの上に、家族の強い願いがこめられた、かけがえのないものです。そして、命は、何年生きたかではなくて、どう生きるかが大切であることを強く思いました。ぼくも、自分の命をかがやかせて、弟の分まで一生けんめい生きていこうと思います。

